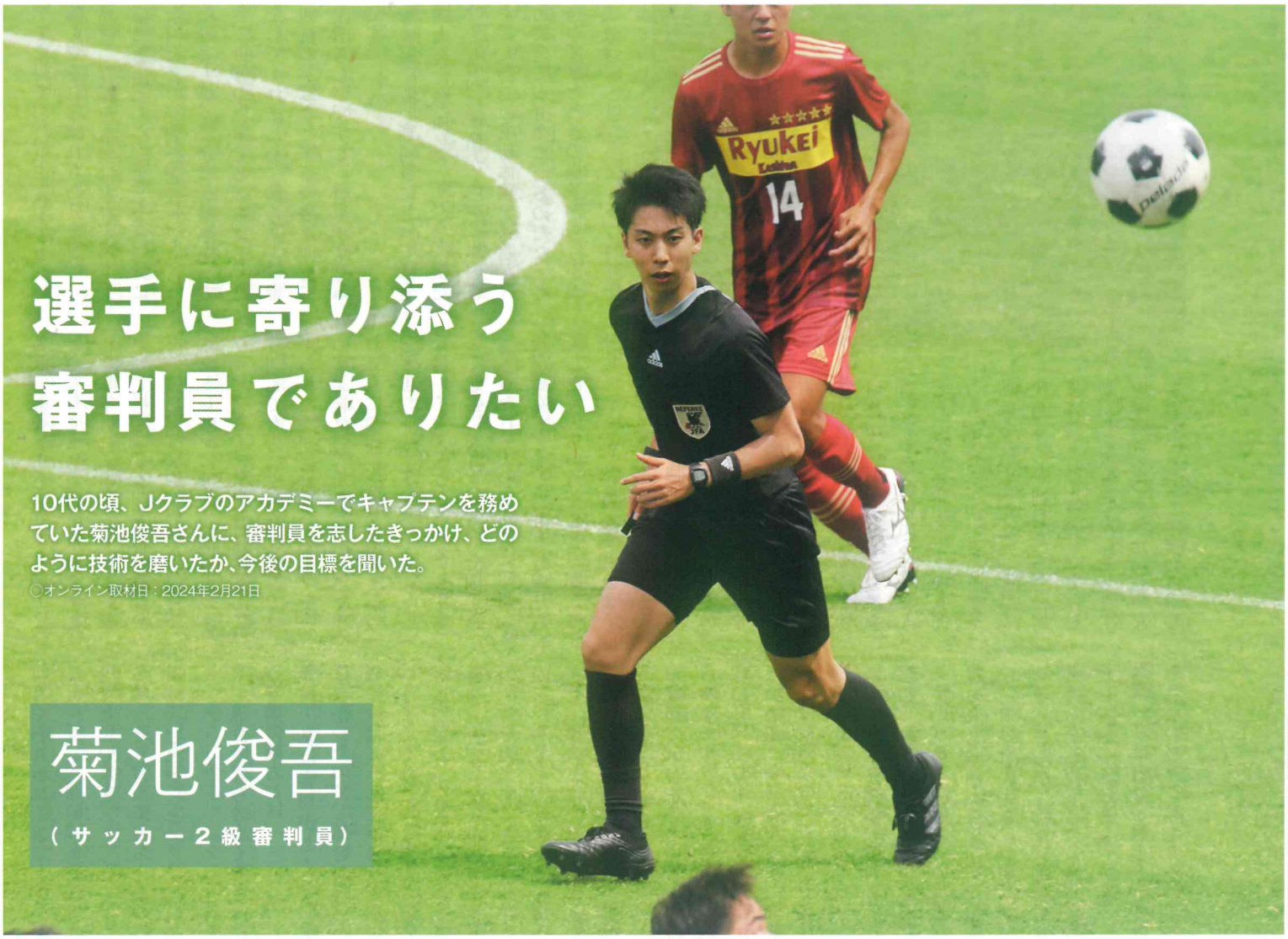

選手に寄り添う審判員でありたい

10代の頃、Jクラブのアカデミーでキャプテンを務めていた菊池俊吾さんに、審判員を志したきっかけ、どのように技術を磨いたか、今後の目標を聞いた。

◎オンライン取材日：2024年2月21日

菊池俊吾

（サッカー2級審判員）

責任があって大変だけどそれが審判員の魅力

——審判員を始めたきっかけを教えてください。

菊池　もともと、ジェフユナイテッド市原・千葉のアカデミーでプレーしていました。僕が高校生のとき、ジェフはU-18年代の千葉県リーグ1部に所属していて、選手は自分たちの試合が終わったら別の試合で副審をするという取り決めがあったんです。高校3年生の夏、千葉県リーグで僕が副審を担当したとき、そこにたまたま五十嵐泰之さん（国際副審、当時）がいらっしゃいました。試合後、「きみ、センスあるね。選手キャリアを終えたらレフェリーはどう？」と軽い感じで言ってくれたんです。

そのときは大学でサッカーを続けようと思っていたのですが、高校3年の終盤はけがに悩まされ、選手としてプロを目指すことは難しいと薄々感じていました。選手に一区切りをつけた後のことを考えたとき、そういえば審判員になるように誘ってもらったなと思って。大学生になってから審判員活動を本格的に始めることにしました。

——そのとき取得していたライセンスは何級だったのですか。

菊池　高校3年の春に4級を取りました。大学1年次に3級、2年のときに2級を取るのですが、大学1年の頃は見よう見まねで笛を吹いていました。競技規則への理解も足りず、審判員として未熟な部分が出た試合もあります。その中で、現場で審判仲間に意見をもらうなど、いろいろと教えてもらったことが大きかったです。2級審判員になってからは地域レフェリーアカデミー（※）という若手審判員を育てるためのプログラムに参加し、2年間、徹底的に指導されました。

※2017年に始まったプログラム。各地域において優秀な若手レフェリーを2年の短期間で集中的に指導し、技術や知識の習得と人間性の育成を目指す取り組みで、9地域それぞれで3、4名の審判員が活動している。

——その活動で印象に残っていることは何ですか。

菊池　場数を踏んで経験値を増やし、同時にレフェリーアカデミーの同期と自分たちのレフェリングを議論したことです。埼玉県のU-18リーグや関東社会人2部リーグなどの試合を担当した後、その場で映像を見ながら自分たちの判定を振り返るのですが、それができる環境はそう多くはありません。議論しながら課題を見つけるという作業が楽しかったですし、印象に残っています。

——審判員として学ぶ中で、成長したと思える部分はどんなところですか。